

# 「農と食」 北の大地から

連載第 199 回

「ヘンプ」から「ローズマリー」へ  
～松家源一さん(東川町)の挑戦～

20年余りにわたる本欄「農と食」シリーズの取材の中でとりわけ印象に残ることのひとつに、北海道知事から免許交付を受け2014年から産業用大麻(ヘンプ)の試験栽培に取り組んだ上川管内東川町の農家・松家源一さんが規制当局の狙い撃ちに遭い、17年夏に大麻取締法の違反容疑で書類送検のちに不起訴処分)された事件があった。試験栽培は挫折を余儀なくされ、起死回生の道を模索する中で出会ったのがヘンプの一種・ローズマリー。積雪寒冷地での栽培技術を確立し、地元の仲間たちと普及グループを創り、さまざまな加工品の開発も手がけてきた。まだまだ課題は多く、70代半ばのベテラン農家にとって正念場を迎えている。そんな松家さんの歩みとローズマリーに懸ける思いを紹介する。



▲ローズマリーの大方は挿し木で増殖。ハウス内での無加温栽培を確立した(3月7日撮影)

◀松家農園が開発した6種類のローズマリービネガー(酢)

# 挫折を乗り越え見つけたハーブ 地域と共に起死回生の道を模索

寒冷地向けの栽培技術を確立  
広がるローズマリーへの関心

かつて産業用大麻(ヘンプ)の試験栽培を手がけた東川町の(有)松家農園。5年前にシソ科のハーブの一種・ローズマリーに着目し、今では露地とハウス合わせて約1万5千株を栽培する。その機能性成分に着目し、加工品の開発にも取り組んできた。

4月下旬、ハウスの中では挿し木したローズマリーが順調に生育していた。積雪寒冷の東川は露地での越冬は難しいため、この時期は室内で育苗しつつ、一部を間引いて加工原料にまわす。そして6月上旬には1株ずつ畑に植えていく。

筆者は昨年10月、町内の体験型観光企画会社(有)アグリテック(中田浩康代表)が同農園で開いた、ワーク

ショップの模様を取材した。収穫作業のほか、挿し木の仕方やローズマリーの活用方法などを体験できる。

農園主の松家源一さん(1948年、旧東川村生まれ)は「ローズマリーに含まれる揮発性成分には認知症の改善に効果がある、といえます。水溶性の機能性成分も含まれるので、ハーブ界の大谷翔平選手のような存在です」などと説明。保健・医療

分野での活用にも期待感を示した。

ローズマリーの葉を蒸留し、精油を抽出する企画もあった。帰宅後、自分のSNSにワークショップのことを投稿すると、蒸留の写真に「いいね」がたくさん付いた。興味のある人は結構多いようだ。

松家さんが解説役で登場する、動画サイトYouTubeの「家庭で出来るローズマリーの育て方」ロー

ズマリーを元気に育てるコツ」は、それぞれ11万回、2万5千回の視聴があり、5月3日現在のチャンネル登録者数は1130人(運営者は「東川すこやかくらしプロジェクト」)。ローズマリーに対する関心が静かな広がりを見せている。

ヘンプの試験栽培にのめり込み  
規制当局に「狙い撃ち」されて…

松家さんの農業人生は56年間におよぶ。1970年代半ばから長く地元(有)松家農園の役員を務め、89年には道の指導農業者に認定。99年に法人化してからは、有機米や野菜を作る一方、玄米や雑穀を加工して6次産業化にも取り組む。

今から15年ほど前にヘンプの有用性を知った。稲の10倍以上の生産性があり、繊維はプラスチックの代替品などになり、種子は食品にでき、広範な利用が可能…。そんな「スーパー作物」に惚れ込んだ。

2014年、東川町が試験栽培を委託する形で、松家さんと元道立上川農業試験場長の菊地治己さん(現「二社」北海道ヘンプ協会代表理事)に対し、当時の高橋はるみ知事から「研究者免許」が交付された。

農園の一角で22アールからヘンプ試験栽培がスタート。15年春の知事選公約に高橋氏は「産業用大麻の栽培推進」を掲げ、道農政部はヘンプ関連施策をまとめた「工程表」まで作成する熱の入れようだった。

試験栽培は3年間続いた。「大麻取締法」の規制対象にならない茎をチップ化して麻炭や麻酢液にしたり、麻炭を使った石けんなどの試作にも挑戦。実直で人が好く、一徹なところもある松家さんは、家族の心配をよそにヘンプにのめりこんだ。そして関連の施設や機器類、試作品の製造などに過大な投資を行ない、多額の負債を抱えることになった。

こうした一方で、大麻草の栽培者免許を持つ鳥取県(有)加工会社社長がマリファナ所持による大麻取締法違反で逮捕・起訴されるなどの事件が相次ぎ、厚生労働省による栽培規制が強化されていった。

松家さん自身も不運に見舞われる。16年春、農場内で作業中に転落事故に遭い、脳挫傷で2カ月間の入院生活を送り、「元の状態に戻るには2年ほどかかる」と医師から宣告されたのだ。しかし、持ち前の負けん気で、退院後の体調不良を押してヘンプの



松家農園の圃場では国内では最大規模の約1万2千株のローズマリーを栽培し、加工品の開発も進めてきた(右上は産業用大麻(ヘンプ)の栽培時に撮影)







ローズマリーの健康増進効果を調べた旭川医大名誉教授の吉田貴彦さん

## 加工品の開発に尽力の一方で ヘンプは規制緩和の動きが進む

こうして寒冷地でのローズマリー栽培を軌道に乗せた松家さんは、加

工品の開発に余念がない。収穫したローズマリーを乾燥してパウダーにした製品をはじめ、蒸留・抽出した精油を使った「ローズマリースプレー」、香り袋、キャンディーなどをすでに商品化している。

昨年には、松家農園のローズマリーと東川産の清酒、町内の伏流水を使った「ローズマリービネガー」が誕生した。「ローズマリーは抗菌力が高いゆえに、酢(ピネガー)にするのは困難とされてきましたが、15年かけた特殊な製法により、世界初の製品化が実現しました」(松家農園HP)という商品である。

栽培上の課題の多くはクリアしたが、次の事業展開を軌道に乗せられるか——松家さんは、こう話す。

「自身にとってもローズマリーにとっても、今年は正念場と考えています。今後、わたしは生産面を担い、加工・販売部門は食品メーカーや起業をめざす人などに移行していきたい。そのための具体的な方法を模索している段階です」

プロジェクトの目的には「加工を通じた普及」が入っているが、任意団体には限界もある。販売事業との兼務は好ましくないと考え、会長は

「すこやかにプロジェクト」の試みは、19年に東川町の助成事業として採択されている(21年度まで継続)。

松家さんは、開花期を迎えたローズマリーの栽培ハウスを無料開放。町内で介護活動に取り組んでいるボランティア団体や、福祉施設向けにクリスマスツリーやリースを制作する専門学校生にローズマリーの苗を提供するなど普及に努めた。

同プロジェクトでは、ローズマリーの揮発成分を人間が吸い込むことによる効果について医学的な見地からも検証。町民が被験者になり、20年には短期・長期の調査が行なわれ、同医大の研究者らが協力した。

松家さんは、かつての苦い経験を踏まえ、こう語る。

「もし可能であれば、再び栽培に挑戦する気持ちはあります。しかし、(法改正されても)新たにヘンプの加工部門を立ち上げる必要があり、本格的な普及にはまだ20年くらいかかるのではないかと。今後、国内で種子の調達に難しいのであれば、助言などではできません」

ヘンプ栽培の挫折を乗り越え、ローズマリーで新境地を開拓しつつ、松家さんのひたむきな挑戦が続く。

■(有)松家農園  
東川町西町7丁目25-1  
☎0166-82-3320  
Fax: 0166-82-3322  
HP: matsukafarm.com

また、長期の検査結果では善玉コレステロールの数値が高くなる傾向が見られたが、「なぜ、そうなるかはまだ分からない」段階だ。精神性疲労の測定に用いるフリッカー検査の結果からは、ローズマリー効果で眼気を抑え、精神的に覚醒する傾向が窺えたという。これらの調査結果などについては、5月中旬開催の日本産業衛生学会で発表される。

吉田さんはローズマリーの活用方法として、「ウェットサウナに吊り下げて香りを楽しむ」「冬場のミニ森林浴に使う」「茎の部分を燻煙材として活用、燻製を製造する」などを挙げ、東川町にも提案している。

「自身にとってもローズマリーにとっても、今年は正念場と考えています。今後、わたしは生産面を担い、加工・販売部門は食品メーカーや起業をめざす人などに移行していきたい。そのための具体的な方法を模索している段階です」

「もし可能であれば、再び栽培に挑戦する気持ちはあります。しかし、(法改正されても)新たにヘンプの加工部門を立ち上げる必要があり、本格的な普及にはまだ20年くらいかかるのではないかと。今後、国内で種子の調達に難しいのであれば、助言などではできません」

戦する気持ちはあります。しかし、(法改正されても)新たにヘンプの加工部門を立ち上げる必要があり、本格的な普及にはまだ20年くらいかかるのではないかと。今後、国内で種子の調達に難しいのであれば、助言などではできません」

工品の開発に余念がない。収穫したローズマリーを乾燥してパウダーにした製品をはじめ、蒸留・抽出した精油を使った「ローズマリースプレー」、香り袋、キャンディーなどをすでに商品化している。

松家さんがローズマリーの栽培・普及に尽力してきたのは、6年前のヘンプをめぐる書類送検事件の汚名挽回に向けた強い思いがあったからである。しかし、時代は大きく変わるうとしている。かつて規制一辺倒だった厚労省が対応を転換し、規制緩和の方針を示したからだ。

普及活動の一環として、東川町内の各所にローズマリーの苗を提供



普及活動の一環として、東川町内の各所にローズマリーの苗を提供

種を播いた。

この年の秋に収穫した採種向けヘンプの管理不備などを理由に、翌17年8月、松家さんは大麻取締法違反(所持、虚偽報告)の疑いで書類送検されてしまう(同9月に不起訴処分)。生産者の脇の甘さに付け込んで狙い撃ちした、見せしめ的な送検劇であったと思う(詳細は本誌17年10・11月号でレポート)。

## 起死回生の植物はローズマリー 会を創り健康効果めぐる調査も

多額の負債に伴う経営危機や健康問題、ヘンプ栽培の挫折と「3重苦」に見舞われ、どん底状態だったが、起死回生のきっかけになった植物がローズマリーだった。

地中海沿岸部が原産地のローズマリーは、シソ科の常緑性低木。小さく細長い葉に甘くさわやかな芳香がある。ラベンダー色の花が咲き、生葉もしくは乾燥葉は香辛料などに利用され、欧州では古くから肉料理の臭い消しなどに使用。古代から薬用にも用いられた。精油の歴史も長く、消臭効果



収穫体験の参加者にローズマリーの見分け方などを説明する松家さん(昨年10月)

などが確認されている。

ヘンプ栽培の継続が困難になった18年、代わりの品目を模索する中で、知人から「外国ではローズマリーの機能性成分の研究が進んでいる」と聞き、可能性があると直感。ヘンプ用のハウスを活用し、冬場の栽培もできる。そこで、ローズマリーの種を播いてみたが上手くいかない。百株ほど苗を購入し、挿し木によって増殖させ、手応えを感じた。

ローズマリーはもともと温暖な地域に適し、積雪寒冷の道内での越冬は難しい。松家さんは、耐寒性がある「アープ種」のローズマリーを入手して生育試験を重ね、ハウス内での無加温栽培技術を確認していく。こうした試みをベースに19年、同

作物の機能性の高さに着目した町内外の有志14人が「東川すこやかにプロジェクト」を設立した。

松家さんを会長に、旭川医大社会学講座教授の吉田貴彦さん(現在は同大名誉教授、NPO法人カムイ大雪バリアフリー研究所理事)と(独)工業所有権情報・研修館の前知的財産プロデューサーの佐々木茂雄さんが副会長に就任。ローズマリーの効用を探る実証実験を進める一方、「アープ種」の産地化などに取り組むことになった。

「すこやかにプロジェクト」の試みは、19年に東川町の助成事業として採択されている(21年度まで継続)。

松家さんは、開花期を迎えたローズマリーの栽培ハウスを無料開放。町内で介護活動に取り組んでいるボランティア団体や、福祉施設向けにクリスマスツリーやリースを制作する専門学校生にローズマリーの苗を提供するなど普及に努めた。

同プロジェクトでは、ローズマリーの揮発成分を人間が吸い込むことによる効果について医学的な見地からも検証。町民が被験者になり、20年には短期・長期の調査が行なわれ、同医大の研究者らが協力した。



ワークショップでは精油を蒸留する体験も

前者は、町民10人が被験者として参加し、ビニールで囲んだ部屋の前でローズマリーを10鉢ほど置き、血圧や心拍数、脳電図などの測定機器を装着し、揮発成分を充満させた部屋の中で3時間すごしてもらったという内容。後者は3カ月間にわたる行なわれ、応募した30〜70代の町民41人が参加。松家農園で育てたローズマリーを3鉢ずつ自宅に置いて日常生活を送ってもらい、生理学的検査をはじめ、採血による生化学・ストレス・免疫機能の検査、認知機能などの調査を行なった。

担当した吉田名誉教授によると、ローズマリーの主な揮発成分にはソモネンやベルベノン、シオネール、カンファ、αピネンなどが多く、近くにいる人の交感神経がやや優位になり、覚醒作用をもたらす、という。

※筆者のHP「滝川康治の見聞録」<https://takikawa-essay.com/> に本シリーズの過去記事を収録しています。ご参照ください。